

大後樂人私撰稿其匿

全貨幻戲樂

第二回



統橋擴舞場

警報發令時に於ける防空上の措置要綱試案

一、空襲警報の場合は勿論、警戒警報發令の場合も直ちに興行を中止し警報解除まで休場致します。

二、右により興行中止の場合に於ける既に發賣済みの入場券は左記の方法で御取扱ひ致します。

(イ) 興行開始中警報發令により即時中止されし場合、その中止時刻が全興行時間の三分の二を經過せざる時は、警報解除の翌日より御買求めの場所に於て他日の入場券と御取換へだけを致し御拂ひ戻しは致しません。

(ロ) 開演後三分の二時間を經過したる時は御引換へを致しません。

(ハ) 興行開始前の前賣入場券は可成他日の入場券と御引換へ下さる様御願ひ致します。

但し御引換へは警戒警報解除の翌日より向十日間以内に該入場券御買求めの場所にて御取扱ひ致します。

三、警報解除されたる場合は左記の如く興行を開始致します。

(イ) 警報解除が當日興行開始時間の四時間以前の場合には當日の興行を開演致します。

(ロ) 若し四時間以内の場合には當日の興行を開演せず、その翌日より普通通り開演致します。

四、以上種々の場合に備へる爲め御買求めの入場券は必ず御用済みまで御所持願ひます。

大阪 文樂座 形浄瑠璃芝居
全員引越興行

第二回 (八月より十四日迄)

夜五時開演

鬼一法眼三略卷

繪本太功記

尼ヶ崎の段

壺阪觀音靈驗記

澤市内の段
壺阪寺の段

伊達娘戀緋鹿子

お七火見櫓の段

夜の部

通し 加賀見山舊錦繪

筑摩川より奥庭の段まで

昭和十八年十二月一日初日

毎夕四時開演

外題五日目替り

◎各等學生團體に限り半額

御觀劇料

- 一 等・(御一名)：七圓三十五錢(稅九割共)
- 二 等・(御一名)：四圓(同六割共)
- 三 等・(御一名)：二圓四十錢(同)
- 三 階・(御一名)：一圓十錢(同四割共)

切符取扱所
銀座地下鐵街芝居切符賣場
電話銀座一八一七六九七〇
プレイガイド各店取扱
銀座本店電話京橋 五〇一三まで

切符賣場用 電話銀座 七五七
事務所用 電話銀座 七五八
お客用 電話銀座 一九〇

木挽町 新橋演舞場

五條橋の段

鬼一法眼三略卷

五條橋の段

牛 若丸 竹本濱太夫

麿 豊竹司太夫

ワレ 竹本津磨太夫

鶴澤友衛門

豊澤團伊三

豊澤仙三郎

豊澤廣若

竹澤團作

解説

享保十六年九月十三日より竹本座に上演、作者は文耕堂、長谷川千四。全曲は五段よりなり、殊に第三段目「菊畑」が有名である。此の五條橋は其の五段目に當るもので、牛若丸と辨慶とが主従の約を結ぶ件を、特に抜き出して、所作事風に一幕にしたものである。

◇床本◇

扱も源の牛若丸、父の修羅の魂魄を慰めんと川風添ゆる夜風の夕程なき秋の空、面白や心うき立御扮装、肌には練の御あはせ紅ひすそこの御させなが糸かず織の大口に薄縁と云ふ御佩刀、五條の橋をさして来る傘のしぶきも高

足駄橋板とどろと踏みならし行こう人を待ち給ふ御有様ぞ不敵なる。西塔の武藏坊辨慶は其頃都にありけるが五條の橋には人をなやます曲者ありと聞きしかばそれを従へ召し遣はんと心も空もはるる夜の月も音羽の山の端に出立つ鑑は黒革織。好む所の道具にはくま手ない鎌鐵の棒、さい槌鋸鉞さす股さすまに權現より賜はつたる大雑刀真中取つて打ちかづきゆらりと出たる有様いかなる天魔鬼神なりとも、おもてを向くべきやうあらじと我身ながらも物たのもしく手に立つ者のアア欲しやと獨り言して打ちわたり向ふをきつと見てあれば橋のほとりの青柳の糸より細き腰付にてすつくと立たる女す

人形

牛若丸 桐竹紋司

武藏坊辨慶 吉田玉徳

がた傘傾けておもはゆぶり。辨慶元來法師の身女になんと云ひかけん詞もなまめく氣色にはち橋のかたへを過ぎ行けば若君彼をなぶつて見んと右へよくれば右に立ち左へ行けば左に行く、ちがひさまに薙刀の柄をはつしと蹴上げばスハ曲者よ物見せんと薙刀柄ながく追つ取りのべ切つてかかれれば若君の薄衣取りのけ打ち奢する。つるぎをあさむく傘の六十間の橋の上ひらりくくるくく車にもまるる牛若丸、辨慶いらつてさそくをふみ遁さじものときり込むを丁とうけたる勢は雨をおこせる蛇の目の傘風ふきはらへば飛びかはしひらりと抜きたる小太刀のかげ星のひかりと水車所は名に負う加茂川の流れに立つ波どうくく、どうと寄すれば白鷺のあしべにあさる片足立ちすがたはつくばね羽子板の拍子はきぬたの音、むそふ返しうつつの太刀ニツ

の鑄音からくくらんかん傳ふささ
 かにの蜘蛛のふるまい木づたふましら
 水の月かや手にたまらぬ姿をしたふ薙
 刀のえたりやおうとしつかと取りえい
 やと引けばえいと引く橋の擬寶珠玉の
 汗鑄を削りて戦ひける辨慶秘術を盡せ
 共遂に薙刀打ち落され組んとすれば切
 はらふ縫らんとするに便りなく詮方つ
 きて橋桁を二三間とびしさり果れ果で
 立つたりける。此辨慶に大汗かかす汝
 は何者ホホ我こそは源の牛若丸シタリ
 道理で大體の人でないと思ふた今より
 後は御家來コレ可愛がつて下はんせと
 頭を橋にぞ付けにける主従三世の縁の
 網約束長き五橋のはし橋辨慶と末の世
 に語り傳へて繪にも描き祇園祭の山鉦
 にも祝ひ飾るぞめでたけれ。

×

×

×

×

尼ヶ崎の段

繪本太功記

前 竹本文太夫

野澤松之輔

後 竹本重太夫

豊澤廣助

人形

武智重次郎 桐竹龜松
武智重次郎 桐竹龜松
替日每

嫁初菊 吉田榮三郎
妻妻 桐竹龜松
妻妻 桐竹龜松
替日每

母さつき 桐竹政龜
眞柴久吉 吉田玉徳
武智光秀 桐竹門造
加藤虎之助 吉田藤一

軍兵 大ぜい

作者は、近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒、寛政十一年七月、大阪豊竹座の撰りに初演された全段十四冊の淨瑠璃で特に光秀の叛逆を中心とした前後の事件が素材として脚色されて居る。

全段の趣向を一瞥すると、妙國寺の蘇鐵について主君小田春永に諷言した光秀は、龍臣の森爾丸と争つた事から勘氣を受け、領地まで召上げられてしまひ、そこに叛逆を思ひ立ち遂に本能寺を襲つて春長父子を弑す。高松城を水攻めにして居る眞柴久吉は安國寺惠瓊、城將清水宗治の妹玉露などの力によつて那家と和し、軍を旋して光秀征伐に向ひ、主君の甲合戦をすることになる。妙心寺に在つた光秀は母の草月の諷言により自害しやうとするが、四王天但馬頭に諫止され、久吉と戦ふ事に決する。

そして母の閑居尼ヶ崎では、久吉とあやまつて母の草月を刺殺し、遂に久吉にも敗れ小栗栖の土民の竹槍にかよつて命を殞す。

と云ふ筋で、發端の蘇鐵の諷言から天正十一年六月一日の安土城變の日の意趣にはじまり、同じく十三日迄の出來事として全段は脚色されて居る。

中にも六冊目の「妙心寺の段」七冊目の「孫市切腹の段」十冊目の「尼ヶ崎の段」等が勝れて流行して居る。

父光秀との出陣を許された十次郎は今宵決死のおもひを胸に秘め、母操に又祖母草月に、生來十八年の恩を謝せずには居られなかつた。それと察した許婚の初菊は十次郎に絶つて名残を惜しむのだつたが、十次郎は所詮討死のおのれと別れ、他家へ縁づきする様、懇々と悟すのだつた。しかし初菊はどうしてこれが思ひあきらめられやう、せめて今宵は凱陣をと、云ひさして後にはたゞ涙、涙であつた。

時刻が移ると、十次郎は初菊のかひ添へて絆おどしの鎧も凜々しく装ひ立つた。臯月と操は、今出陣の門出と、銚子盃の用意をし、十次郎初菊に酌み交させるが、これは祝言の盃であり、又今生の名残の盃でもあつた。臯月の心中は、なまなか出陣を止めだして、主殺し光秀の子として生き恥をかゝさうより、むしろ健氣な討死をさせた方が、と苦しい計らひだつたのである。

折柄聞える政太鼓、十次郎はまつしぐらに戰場へと馳せ参じた。この様子を伺ひ見た最前この家に宿をとつた旅僧は、さり氣なく、風呂の案内をするのだつたが、まあお先へと云はれるまゝに、又湯殿口へ入つた。涙をかくした老母、操、初菊の三人も奥へと立つて行つた。

あとと遠近に鳴きしきる蛙の聲、そ

の中を拔足さし足忍びよる簀笠をつけた武士、それは武智光秀であつた。最前この家に入ると見たのは、僧形に身をやつしては居るものゝ正しく敵將眞柴久吉と、門前の青竹をひつそいで竹槍を作つた。そしてこゝぞと突込む槍先に、わつと叫んだのは眞柴にあらぬ老母臯月だつた。餘りのことに光秀も茫然とした。この騒ぎに操も初菊もしり出で、このあり様は何事と老母に取り纏つた。臯月は苦しい眼を開き、叛逆人のわが子光秀を、たゞ人非人と罵り、その天罰は親に報ひ、この通り青竹のひつそぎ槍で最後をとげるのだと氣丈にも熱涙を揮つた。操は又夫光秀に、門出の折の諛言をくりかへし、せめて母御の御最期に善心に立ちかへつて呉れ、と夫を思ふ誠の涙にむせぶのであつた。強情我慢の光秀は、どうしてこれを受けつけやう、悪逆無道の

小田春永を亡ぼすは、民を安むる英傑の志と聲あらゝげて諛言を阻んだ。その折しも表口から刀を杖に早くも手負の十次郎はよろめきゝ立ち歸つて、斷末魔の苦しい息を吐くのだつた。光秀は、わざと荒々しく、戦場の仔細を尋ねると、味方は總敗軍、四王天但馬頭は行方知れず、と云ふのである。さう云ふ中にも早致死期の老母と十次郎、初菊も操も身もだへして悲んだ。流石の光秀も、これにはこらへかね、はらくと落涙するのであつた。又もや聞ゆる人馬の物音に、光秀は物見へ上つて見廻すと一面の千生飄の旗印、さては久吉攻め寄せ來ると齒噛みをする折、眞柴筑前守久吉對面せんと奥より聲をかけたのは、以前の僧形とは打つて變つた武裝の久吉だつた。久吉は、山崎にて時を移さず雌雄を決せんと立ち去らうとするので、光秀も首を洗つて觀念せよ、と互に敵味方睨み合ひつゝ別れるのであつた。

人形

女房 お里 桐竹紋十郎

座頭 澤市 吉田玉助

觀世 音 吉田玉男

梗概

澤市内より壺阪寺の段

大和國壺阪寺の片邊りに澤市と云ふ座頭が住んで居た。女房のお里は座頭の妻には惜しい程美しいと云つて近所でも評判だつた。それが盲目の澤市には祕かにねたましかつた。それにお里と夫婦になつて丸三年、毎夜七ツの鐘が鳴るとそつと家を抜け出して行くお里が不審でならなかつた。誰かお里が思ひを通はす男があるに相違ないと澤市は思つてゐた。然し盲目の自分の身を考へるとき憐みさへ加はつて、いつそ黙つて居やうとも考へた。

とある夕方である。澤市はいらくする胸をしづめて、遺る瀬ない三味線弾いてゐた。

「鳥のこえ、鐘の音さへ身にしみて思

ひ出す程なみだが先へ……」

澤市は自分でこの唄がかなしかつた。

めづらしく三味線などを弾いてゐる夫の姿がお里には機嫌よく見えなかつた。お里がそんなことを云ひ出すのが澤市は心外だつた。いつそのことお里に云つてしまはう、澤市はさう決心した。そして今迄不審に思つて居た事がらを怒りの聲さへ交へて語つたのだつた。

それを聞いたお里は、その譯を今まで話さなかつたとは云ひ乍ら、夫の言ひ分が自分の心に引き較べてあんまりなのに泣きくづれた。

譯はかうだつた。澤市とお里は從兄弟同志一緒に育てられた仲だつた。その中に澤市は痲瘡にかゝつて眼までつぶれてしまつた。然しお里は貧苦の中にも夫を思ふ一心に働いた。そして澤

壺阪觀音靈驗記

澤市内より壺阪寺まで

澤市内の段

壺阪寺の段

解説

前 竹本住太夫

野澤吉三郎

後 豊竹呂太夫

豊澤仙糸

ツレ 鶴澤清友

「三つ違ひの兄さん」として有名なこの澤瑠璃は明治になつてから出来た作で、近代の作としてこれ程流行を極めて居る曲は他に見當りません。それは作柄よりも主として作曲によるもので、作曲者近世の名人豊澤國平の力に負ふものであります。作詞者の名は傳はつて居りませんが、現在の詞章は國平の妻ちか女の補筆によることは確かであります。

最初國平の節付によつて壺阪を語つたのは明治十六年十月、大江橋の席の島太夫であります。二度目に世話の名人住太夫を経て越太夫に傳はり更に先代大隅太夫に傳はりました。大隅太夫がこれを語つた時、國平は更に節付を改作し、現在の様な派手

な手がはじめて付けられたのであります。以來この曲は人氣に投じ大流行するに至りました。

流石近代の作曲だけあつて、その節付は實に繊細に流麗に巧緻をきはめて居ります。語り出しの地唄「儘の川」にしても、澤市の歌ふ「菊の露」にしても、又例のお里のクドキ「三つ違ひの兄さん」或は段切れの「お禮参り」の萬歳唄いづれも、初代國平の才能をよく察知することが出来るのであります。

歌舞伎狂言で致します時に、悪者雁九郎などを書き加へて居りますが、人物はお里と澤市、それへ觀世音だけ、場面も澤市内と御寺の谷底のみ、至つて簡単な短篇であります。澤瑠璃中の佳品の名に背きません。

市の眼病平癒のためこの三年の間と云ふもの雨の夜も雪の夜も壺阪の観音へ既足詣りをつゞけて居たのだつた。

それと解つてみると澤市は貞節な妻の前に自分がならべた邪推がはづかしかつた。そしてお里に泣いて詫びるのだつた。

すべてを打開けたお里は、澤市の心を引立てゝ一緒に観音へ参詣してみた。とも云つた。臍甲斐ない自分をさうまで云つて呉れる女房に對しても、眼が開くものなら開きたい、と澤市は思はないでは居られなかつた。

何時の間にか夜になつた。お里に手を取られた澤市は険しい坂道をやつた。二人はつゝましましやかに西國六番の札所此處壺阪觀音の御寺に額づいて御詠歌を上げた。

この眼が癒るものか、癒らぬものか三日の間此處に籠つて祈らうと、澤市はお里をその支度之家へ歸してしまつた。然し澤市はもう決心して居たのだあの貞節な妻にこの上面倒を見て貰つても、所詮は治ることのない業病、いつそひと思ひに谷へ身を投げてしまはうと思つたのである。

杖を力に澤市は裏山へ上つた。遠く聞える谷間の水音をしるべに、唯未來を祈つて身を躍らせて谷底深く身を投げた澤市だつた。

一人残して來た夫の身が案じられ、お里は御寺へ立歸へつて見ると夫の姿は見えない。呼べど叫べど松風と谷の音ばかり、お里は狂氣の様に澤市の行方を尋ねた。ふと見ると崖の上につき立てた見覚えのある夫の杖、はるか谷底を見やれば、さす月光にありく澤市の姿さへ見えるのだ。夫澤市を

失つてお里はどうして生きて居る甲斐があらう。お里も澤市の跡を追つて谷間へ身を投げたのであつた。

やがて夜が明けかゝる頃、谷間に横はつた澤市お里の死骸には夜明けの風がつめたくあつた。何處からともなくかほる靈香、妙な音楽につれありく姿を現じ給ふたのは壺阪の觀世音だつた。

觀世音は澤市、澤市、お里、お里、と二人を呼びさますのだ。二人は眠りから覺めた様に眼を開いた。お里の貞心に佛も感じ二人の命を救つたのである。さう云へば澤市の眼も開いて居た。觀世音は、三十三所の靈場を巡禮して佛恩に報ひよと云ひ残して姿を消してしまつた。

二人の喜びは何にたとへ様も無かつた。たゞ相抱いて躍り狂ふ二人だつた。

お七火見櫓の段

伊達娘戀緋鹿子

火見櫓の段

竹本澤摩太夫

豊竹司太夫

竹本濱太夫

野澤市治郎

豊澤仙三郎

豊澤廣若

竹澤團作

解説

西鶴の「好色五人女」にまで扱われた、戀故に放火の大罪を犯した八百屋お七の實話を劇化した紀海音作「八百屋お七戀新櫻」の増補作「潤色江戸紫」を更に翻案改作したのが本曲全八段で、作者は菅専助、松田和吉、若竹笛野、安永二年四月北堀江座に上場。此の作ではお七は吉三をして天國の寶劍を主君に届けさせたい一念で、火刑も厭はず夜半に火の見櫓の半鐘を打つて市中の木戸を開かせる——放火の代りに櫓の半鐘を打つ趣向に改められてゐる。後に歌舞伎のお七人形振りともなつた色彩感の饒れた一場である。

床本

後にお七は心も空、廿三夜の月出ぬ

中と、體は爰に魂は、奥と表に眼配り餘所の數きも白雪に、牙へ行く遠寺の鐘かうく、響き渡れば、ヤア彼鐘は早九ツ、夜中限りに江戸の門々を閉めては、大切な用ある人も往來ならぬ敷しいお觸れ、假令劍が手に入つても今夜中に届ける事が叶はねば、吉三様は矢張り切腹。ハア悲しや是りや何とせう如何せうと立つたり居たり氣はそぞろ、更け行く空の怨しく、鐘鳴る方を睨みつけ、拳を握り齒をかみしめ、只うつとりと立つたりしが、ふつと氣の付く表の火の見、チラ然うじや、アノ火の見る半鐘を打てば、出火と心得、町々の門を開くは定、思ひのままに劍

人形

娘 お七 桐竹紋十郎

下女 お杉 桐竹紋太郎

丁稚 彌作 吉田龜夫

武兵衛 吉田兵二郎

を届け、夫の命助けいで置かうか鐘を打つたる此の身の科、町々小路を引廻され、焼殺されても男故、少しも厭はぬ大事な、思ふ男に別れては、所詮生きては居ぬ體、炭にもなれ灰ともなれと、女心の一筋に、帯引締めて裾引上げ表に駆け出で、四辻に咎むる人も嵐に凍て、雪は凍りて踏滑る、椅子は即ち劍の山、登る心は三悪道の通ひ道杉は難なく奥の間より、劍を盗んで逃げ来る跡、ヤイ大盗人めと駆来る武兵衛、引き抱へ撈ぎ取る劍、遣らじと縫るを蹴飛ばす、どつこい然うとは取付彌作。是や何ひろぐと太左衛門、引擦りつくる其手を直ぐに、腕捌みにこりや、彼處は見下す雪の屋根、其儘三途の瓦葺、睨む地獄の鬼瓦、追立て責むる身の因果、廻りくる、七は難なく火の見の上撞木追取りぢや

ん、音より間もなく爰彼處、一度に打出す警鐘の、響きにつれて開く門々、嫌はれた意趣晴し、引縛つて訴人すると、お杉を蹴飛ばし上り来る梯子を下より打返せば、武兵衛は大地へ眞逆様、持つたる脇差取落すを、杉は追取り吉三が方、駆け行く跡を追掛る、太左が首筋ははいなと、擔いで投げ込む用水桶、腰骨折つて蠢く武兵衛お七も飛んで遠近の、人の噂と、なりにけり。

國土を母艦に

飛び立て少年

筑摩川の段

豊竹松島大夫
鶴澤燕三

通し
狂言
加賀見山
舊錦繪

筑摩川の段より奥庭の段まで

人形

前田大領 吉田兵次
家老山左衛門 桐竹紋太郎
鳥井又助 吉田玉助

鳥井又助住家の段

竹本七五三太夫
鶴澤綱造
竹本大隅太夫
鶴澤清八

人形

女房お六 桐竹紋十郎
倅又吉 桐竹龜之輔
亭主兵衛 桐竹紋司
庄屋治良作 吉田光造
谷津求馬 吉田榮三郎
鳥井又助 吉田玉助
安田庄司 桐竹門造
村の歩き 吉田兵次
駕かき 大ぜい

解説

現在では「加賀見山舊錦繪」の外題で、今回上演の如く筑摩川から又助住家、草履打、廊下、長局、奥庭までを通し上場されてゐるが、本来これは、二つの作をつき合たものである。即ち大槻傳藏の野心にかゝらむ、所謂加賀騷動物としての天明元年京四條中村猪八座興行の歌舞伎「加賀見山廓寫本」(奈河龜助、奈河七五三助等合作)を元にして作つた中村魚眼の「加賀見山廓寫本」(寛政八年道頓堀東の竹本愛藏座初演)と、享保九年四月三日、松平周防守の邸内で局澤野(岩藤)が中老お道の方(尾上)に、草履打の侮辱を興へ、お道の方は憤悶の餘り自殺したので、其の侍女おさつ(お初)は澤野を刺し、復讐したと云ふ事

件を、巧みに脚色して加賀騷動に取合せた勝容藏の「加賀見山舊錦繪」(天明二年正月江戸外記座上演)との二作を連結して、お初の仇討を中心に、加賀騷動の色彩を一層明確にした、構成をとつたものである。斯様な例としては、他に「伊賀越」の場合に、「道中双六」と「乗掛合羽」とを、なひませにしたも如きものがある。

尚、此の「舊錦繪」と「廓寫本」とをつき合せて上演したのは、天保五年二月二十八日初日の、御靈の芝居からである。

梗概

濁流渦巻く筑摩川、雷鳴を伴つた豪雨に、夜は黒一色に蔽はれてゐる。加賀百萬石の太守、前田大領は手練

草履打の段

局 岩 藤 竹本織太夫

中 老 尾 上 竹本伊達太夫

鷺 の 善 六 竹本隅若太夫

こ し 元 豊竹宮太夫

こ し 元 豊竹つばめ太夫

野澤喜左衛門

人形

局 岩 藤 桐竹政龜

中 老 尾 上 吉田榮三

鷺 の 善 六 吉田玉徳

こ し 元 大 ぜ い

の手網さばきも鮮かに、此の激流に愛馬を渡してゐるが、突如、姿を現はした曲者の爲に、あつと云ふ間もなく、水中へ引き込まれて了つた。

それから早くも五年の月日は流れて行つた。

鳥井又助の主人谷澤求馬は、悪人蟹江一學の讒言に依つて主家を罪なくして勘當され、今では浪々の貧苦を、家臣又助の許に世を忍んでゐた。

金の才覚に苦しむ夫を見兼ねた妻のお大は、其の身を苦界に沈めて金を調べ、俵松吉等と切ない別離を悲しみながら、家を出て行つた。

折柄、深編笠に人目を忍で家老安田庄司が訪ねて來た。谷澤求馬は懷中から主家の重寶、菅家の一軸を取り出して、何卒此の功に依つて歸參のお取りなしを——と、願ふのだつた。庄司は

それを受け取つて、暗然として、其の御主君の既に世の亡き事を告げたが、求馬、又助の失望、落膽——それは他の見る眼もいぢらしい程であつた。

と、庄司は、求馬への引出物として一腰の刀を指し出したが、見れば八ツ梅の紋所のある一刀。それこそ求馬が主家から拜領したものである。而も勘當された時、確に望月源藏に預けた品なのだ。それを如何して——と、不審でならなかつた。それと見た又助は、その刀こそ自分に覺えがあり、それの斯く現はれし上は、主人求馬様の御歸參も叶うた。下郎の手柄——と誇り顔に云つた。

これを聞いた庄司は、突然、鳥井又助覺悟せよと、主君の位牌を懷中から取り出し、主君は五年以前、此の刀にて不慮の御最期を遂げられ、此の刀は近頃水底より出でしもの——と、物語

廊下の段

竹本織太夫

竹澤團六

人形

召使 お冬 吉田常次

召使 お仲 吉田龜夫

召使 お初 吉田文五郎

局 岩藤 桐竹政龜

伯父 彈正 桐竹龜松

つた。そして谷澤求馬、鳥井又助の兩人こそ、主君を害せし曲者ならんと、詰め寄つた。

すつくと立ち上つた求馬は、又助の髻を掴んで析檻したが、溜息つく又助は、突如我が子又吉を引き寄せると、その細首を打ち落した。求馬は竹槍を振つて又助に突きかかつた。又助は太刀を取つて刃向つたが、遂に脇腹を刺され、苦しい息の下から、筑摩川に於て主君前田大領を討つた次第を物語つた。

それに依れば又助が、曾て主人求馬の仇と、蟹江一學を刺さんとした時、望月源藏がそれを止め、「今討たば變の元、歸りを待つて討ち取れよ」とて一刀を與へられ、教へられたがままに其の刀を以つて、筑摩川の水中にて討ち止めたが、意外にもそれが大殿であつた——と。

そして又助は、己が腕に喰ひ付き、口惜し涙にくれるのであつた。庄司も求馬も、茲に始めて仔細を知つた。

猶も又助は、妻の心を思ひやつて泣いたが、其時門口に忍んで様子を聞いてゐた女房は、わつと聲を上げ、涙と共に走けるがいなや、落ちた刀で我れと我が咽を刺し貫ぬいた。

庄司は聲を勵まし、臨終の又助の耳へ、懺悔に滅する汝の重罪、眞の敵は望月左衛門、又助が白狀こそ叛逆人の訴人も同然、功に免じて谷澤求馬の歸參を取りなすと、情のこもる言葉をかけた。

又助は、につこり笑を浮かべて息を取き取つた。

櫻花爛漫たる春——茲は鶴ヶ岡の社頭である。

長局の段

切

豊竹古頼太夫
鶴澤清六

人形

中老尾上 吉田榮三
召使お初 吉田文五郎
町人 大ぜい

奥庭の段

豊竹つばめ太夫
鶴澤燕三

人形

召使お初 吉田文五郎
局岩藤 桐竹政龜
忍岩藤 吉田多三郎
安田庄司 桐竹門造
こやし元 大ぜい

局岩藤、中老尾上、其他奥女中達が
絢爛と着飾つて、春の一日も早や暮れ
近くであつた。

日頃から、町人の娘上りと尾上を憎
んでゐた局岩藤は、意地悪く尾上に當
り散らし、其の果てには、大勢の見る
前で、己が草履で散々に打擲した。
尾上は、然しちつと堪へてゐた。そし
て數多の女中達の慰めの言葉に、口惜
し涙を抑へてゐた。

尾上の召使のお初は、御殿の廊下の
溜り間で、多くの腰元達から、昨日主
人尾上が、鶴ヶ岡の社前で、局岩藤の
爲に散々に辱められ、その上に草履で
打たれた事を聞かされて、怒りに胸を
湧き立たせてゐた。

其所え當の岩藤が奥から下つて来て
お初を見ると、
「主が主ならおのれまで」

と、何んの罪もないお初をまで、引
き捨てて打ちたたくのだった。

お初は口惜し涙をかみしめて、じつ
と堪へてゐた。

折柄、岩藤の伯父彈正が來かかつり
二人は何か密談を始めた。二人はかね
々々主家横領を企んでゐるが、中老尾
上に、其の密事を握られてゐたので、
尾上に喧嘩を挑んで、陥れ様として
ゐるのだつた。鶴ヶ岡で恥辱を與へた
のも其の爲であつたが、尾上は主家の
大事を思つて、其の場を堪へ忍んでゐ
たのだつた。

お初は主人尾上が、岩藤の爲に辱め
られた事が残念で堪まらず、せめては
主人を慰さめんものと、尾上が奥御殿
から下つて來るのを待つてゐた。

懸て尾上は、うちしほれた様で下つ
て來たが、體の加減が悪るいとて、自
分の居間へ引きこもつて了つた。

お初は主人の心中を察して、いろいろと慰めた。そして、萬一短慮な事でもあつてはと、忠臣蔵の判官を例に引

いて、それとなく諫め止めるのだつた。尾上は利漣で、忠義なお初の心情が嬉

しく、思はずも泣けて來たが、此の時既に死を期してゐた尾上は、何氣なく

お初に藥湯を調へる様に命じ、其の際に遺書を認めると、岩藤に打たれた時

の草履と共に、それを文庫におさめ、里方の兩親に届ける様にと云ひつけ

た。お初は虫が知らせるのか、心は進ま

なかつたが、主人の命に仕方なく、何卒御身恙かなき様にと念じつつ、出て

行つた。後に尾上は、悲憤の泪にかきくれたが、臆て決然と、お初の忠實を

感謝しつつ自刃して了つた。お初は心急ぐままに、門前へ來かか

つたが、擦れ違ふ人の噂や、不吉な鳥

の鳴き聲に胸騒ぎを覺へ、思ひきつて文箱を開くと、草履と書置――

ハツと胸を突かれたお初は、心も空にとつて返したが、既に尾上は紅に染

つて息は絶へてゐた。死體に取り絶つて泣き口説くお初――だが、モウ總て

は遅かつた。併し、氣を取り直したお初の面には、深い決意があつた。懐劍

を握りしめたお初は、主人尾上の仇、岩藤に怨みを報いんものと、奥庭へ忍

び込んだのである。空も暗い奥庭には、忍びの男が何か

土中に埋めてゐた。そして合圖の笛の意と共に、肩岩藤が姿を見せた。

「若君調伏の一品、首尾よう土中へ埋めたか、サ、褒美を取らす……」

岩藤は聲をかけたが、その言葉の下に怪しの男は、岩藤の手にかかつて

た。

先刻から様子を窺つてゐたお初は、此の時岩藤の前に現はれた。流石に岩藤もギョツとした。

お初は尾上の悲惨な死を傳へて、生前のお禮の印しと、帛紗包を手渡した。岩藤は不審ながらも聞いて見ると、何

んと覺えの草履――と、お初は、

「主人の仇、お家の敵」矢庭に叫んで岩藤に切つてかかつ

た。岩藤もこれに應じたが、念力通す恨みの刃は遂に岩藤を刺し通した。

物音に、「曲者ッ――」と大勢の腰元が現はれ、家老安田庄司も姿を見せた。お初は尾上が手に入れてゐた密書

を差し出した。斯うしてお初は、主人の仇を報じると共に、お家の仇を亡ぼす事が出來た

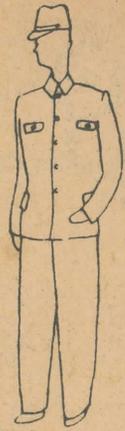
のである。臆て召使から中老役に取り立てられたお初は、其の名も二代の尾上と改められて、忠臣烈女の名を諡は

れたのである。

昭和十八年十一月廿八日印刷 東京都豊島區池袋町三丁目一四二二 東京二〇四 昭利十八年十二月一日發行 編輯兼發行所 編者 史

決戦下服装に就き

皆様へお願い



今こそ決戦、一億總蹶起の時、撃ちてしまむの氣概に燃えて戦争生活の實踐に徹底せねばなりません、演劇、演藝、映畫亦決戦下必要不可欠な戦争生活の一部面であることは今更申すまでもなく、随つて御觀覽は戦争生活の一部であり延長であります。

既に戦争生活の延長である以上、御觀覽の御態度、御服装等飽くまで國家の要求に融け込まなければならぬと存じます。

從來御觀覽の場合、動もすれば服装華美に流れ過ぎると云はれました平時なら兎に角、此の決戦下に左様のことのあるべき筈はありませんが、然し大勢様の御集りの劇場ですから、服装は格別目立つのでありまして、その場合の服装が時代の流行を作るとさへ云はれました、事實さうだったのであります。

新調は今後
は衣生活の
見合はよう
せはしようか

だから今日御集り下さる皆様は服装の簡素美、剛健美、明朗美に徹底致され率先範を垂るるの思召して、總て決戦下にふさはしい服装を御召し下さらば、それが一代の風俗を作り遅ましい日本人の心意氣となつて、決戦下一億の士氣はいやが上にも昂揚さるるに至りませう。

どうぞ皆様。

これからは、殿方も、御婦人方も、假りにも絢爛華美など云ふ舊觀念を美事一蹴し簡素、剛健、明朗な服装を以て場内を御埋め下さい。そして御心豊かに朗らかに、決戦下必要不可欠の健全娯樂を、御覽下さいませう御願ひいたします。



松竹株式會社

定價 一部 貳拾錢